

動物と共に描かれた
謎の「記号」

—— ラスコー洞窟の壁画が描かれた2万年前の人類は、どのような暮らしをしていたのでしょうか。

五十嵐 野生動物の狩りを中心とした「狩猟生活」の時代です。4万2000年～1万4500年前頃のヨーロッパで、そうした狩猟生活を送っていたのがクロマニオン人です。参考までに、日本列島の縄文時代が始まるのは古く見積もって1万6000年前頃です。

—— ラスコー洞窟の壁画には、何が描かれているのでしょうか。

五十嵐 合計で600～850頭もの動物が描かれています。その描かれ方は様々で、顔料で輪郭だけを描いた線描画、色を塗った彩色画、さらに壁面に道具で刻んで描いた線刻画、そしてそれらを併用した絵もあります。

五十嵐 ラスコー洞窟は、フランス南部のモンティニャックという村の近くの小高い丘の上に入口があります。1940年、近くに住む4人の少年と遊んでいた犬が洞窟に落ちたことが、この世界的発見のきっかけでした。

発見当初は一般の人々も見学ができていました。特に第二次世界大戦後は、世界中から多くの人々が押し寄せました。しかし、そうした中で徐々に洞窟内の環境が変わり壁画が劣化してきたのです。そして1963年からは、洞窟内に入れる日数や人数を制限して限定的に見学を受け付けてきましたが、2001年8月からは一切許可されていません。

それを考えても、今回のラスコー展は旧石器時代の人々の息吹を感じるとても貴重な機会だと思います。東京会場、東北会場は残念ながら終了しましたが、7月11日～9月3日までの夏休み期間に九州会場で「ラスコー展」が開催されます。

ラスコー洞窟の全貌を紹介
2万年前の人類に触れる

—— 五十嵐先生が学術協力をされた「世界遺産 ラスコー展」について教えてください。

五十嵐 ラスコー洞窟の壁画は、およそ2万年前の旧石器時代にクロマニオン人が描いたと言われる壁画です。発見されるまで奇跡的に美しい状態で保存されていて、世界中で大変な話題となりました。今回の「世界遺産 ラスコー展」は、壁画保護のために研究者も見学が出来ない洞窟内部の世界を再現し、洞窟で見つかった生活道具などを展示したものです。フランス政府公認のもとで制作され、世界各国を巡回してきた展覧会に日本独自のコンテンツを加えて紹介しています。

—— フランスにあるラスコー洞窟は、どのようにして発見されたのでしょうか。



1942年～1945年の間に撮影された入口風景
© SPL Lascaux international exhibition



1940年代後半に設置された石段入口と青銅製の扉
© SPL Lascaux international exhibition

訪ねて
ミュージアムを

と き：2017年3月3日
ところ：東京科学機器協会会議室

「世界遺産 ラスコー展」学術協力
東京藝術大学大学院美術研究科博士リサーチセンター

先史学博士 **五十嵐 ジャンヌ** 先生 に聞く

特別展「世界遺産 ラスコー展」探訪
2万年前のクロマニオン人が描いた
洞窟壁画の息吹に触れる

聞き手：外嶋 友哉 日本科学機器協会 広報委員
岡田 康弘 同 事務局長
(取材・編集協力：クリエイティブ・レイ(株) 安井久雄)

五十嵐 ジャンヌ 先生のプロフィール

1991年 東京藝術大学美術学部 卒業(美術学士)
1995年 大阪大学大学院文学研究科博士前期課程 修了(文学修士)
1996年 フランス、パリ、古人類学研究所
「第四紀：地質学、古人類学、先史学」高等教育免状(D.E.A.)取得
2003年 フランス国立自然史博物館 博士号取得(先史学博士)
2016～ 東京・国立科学博物館、宮城・東北歴史博物館、
2017年 福岡・九州国立博物館特別展「世界遺産 ラスコー展」学術協力者
現在、東京藝術大学大学院美術研究科博士リサーチセンター非常勤講師
他 複数の大学で非常勤講師

特別展「世界遺産 ラスコー展」 <http://lascaux2016.jp>
2017年7月11日(火)～9月3日(日)福岡・九州国立博物館
<https://lascaux-fukuoka.jp/>



世界遺産ラスコー展 再現壁画展示
最新テクノロジーを駆使して精密に復元したラスコーの
実物大の洞窟壁画を間近に体験でき、迫力満点だ。
© SPL Lascaux international exhibition



特別企画

ウマ・シカ・ヤギ・トナカイ・バイソン、ネコ科の動物のような体格で真っ直ぐなツノを持つ奇妙な動物ユニコーンなどです。さらにライオンなどの「ネコ科の動物」も数多く見られます。

それらの動物は単独像もあれば、群れの時もあり「4頭の大きな牡ウシ」「疾走するウマの群れ」「小さなシカの群れ」など様々です。また「体は赤褐色、首から上は黒い牝ウシ」や「たてがみは黒で体は黄褐色のウマ」「褐色のバイソン」など色彩も色々です。そのように動物が見分けられるのも、描写が非常にすぐれているからです。

—— ラスコー洞窟には「ヒト」は描かれていないのですか。

五十嵐 実は「ヒト」も一体だけ描かれています。ラスコー洞窟

内の、井戸のようにタテ穴になっている場所にある壁画なので「井戸の場面」という名で呼ばれているのですが、バイソンとヒトが描かれています。槍が突き刺さって腸がはみ出たバイソンやヒトに向かって角を突き立てているように見え、そのヒトの下にはトリをかたどった道具と思われるものが描かれています。この空間はラスコー洞窟の入口から奥の方にあるのですが、他の空間に比べてきわめて壁画が少ないのです。そこになぜそうしたヒトが登場する場面が描かれたのか定かではありません。

—— クロマニオン人は狩猟生活をしながら、なぜこうした壁画を残したのでしょうか。

五十嵐 勘違いされやすいのは、

壁画が残された洞窟は生活していた場所とは別ということです。この時代に生活していた場所は洞窟の中でなく岩陰なのです。ラスコー洞窟は、クロマニオン人が壁画を描くことを目的とした場所と考えられます。洞窟内は奥へ進むと天井が低くなり、ひざまずいて這うようにしないと入れない場所もあるのですが、そこを通った先に壁画がたくさん描かれています。

もちろん電気がない旧石器時代ですから洞窟内は真っ暗です。なぜそのような場所にわざわざやって来て、顔料を用意して、しかも人が背伸びしても届かないような高い場所に苦労してたくさんの壁画を描いたのか？なぜ動物を描いたのか？さらに記号を描いたのか？多くの解釈がなされていますが、どれも確証がありません。



洞窟に入っすぐの「牡牛の広間」には、巨大な牡ウシやシカの群れが迫力満点に描かれている。© SPL Lascaux international exhibition



井戸の場面は、バイソンやヒトが登場する何らかの物語表現が感じられる。

© SPL Lascaux international exhibition

巨大で黒い牡ウシは、ウマや四角形記号と重なる。

© SPL Lascaux international exhibition

特別企画



古代人類の復元を専門とする芸術家が研究上の解釈に基づいて制作した等身大のクロマニオン人。貝殻のビーズをつけた頭飾りなどのアクセサリ、毛皮の加工など、高度な裁縫技術までもが再現されている。© SPL Lascaux international exhibition

また、動物の絵だけでなく多くの「記号」が残されているのです。

—— その記号とは、どのようなものなのでしょうか。

五十嵐 ラスコー洞窟には「点状の記号」「十字形の記号」「四角形の記号」「矢印のような記号」「星の形をした記号」など、総計400個もの記号が確認されてい

ます。その中でも特徴的な記号のひとつに、通称「紋章」と言われているカラフルな四角形記号があります。それは赤・黒・紫・茶色などで四角形が鮮やかに塗り分けられ、まさに中世の紋章のようです。

また洞窟内から発掘された骨角器などに、壁画に見られる記号と同じものが刻まれていることもあります。このように「動物像」

と共に「記号」があるのは、ラスコー洞窟に限らずクロマニオン人が残した様々な洞窟壁画に見られます。

—— その記号には、どのような意味があるのでしょうか。

五十嵐 そこが私の研究テーマのひとつであり、世界中の人類の謎でもあります。「洞窟壁画は、なぜ描かれたのか？」という、誰も確固たる答えを持ち合わせていない人類の謎です。それを色々な過去の研究も紐解きながら、動物像と記号の関連パターンなどを整理していき、少しでもその謎に近づけたらと追求して今に至っています。

クロマニオン人は何を描いたのか

—— 壁画には、どんな動物が描かれているのでしょうか。

五十嵐 身近な動物がたくさん描かれています。牡ウシ・牝ウシ・



洞窟の奥の「身廊」には隠れた線刻が浮かび上がる。2メートルもの大きなウシは刻線で輪郭を描き、次に絵の具を塗ってからもう一度線刻している。

© SPL Lascaux international exhibition

特別企画

あったのですが、そうとは限らないことも分かったのです。

例えば、ある洞窟に“動物を刺しているように見える縦線の記号”があり、それをある学者は「動物を殺す場面」と解釈していたのですが、調べると縦線の記号の方が動物像より先に描かれていたことがあったのです。「この動物のこの部分には、この記号が見られる」という当時の「文法」のようなものが少しでも分かればと研究を続けていますが、部分的に傾向が分かって、全てが分かるまでの道のりは果てしないものです。

そして、ある法則性を見つけ出しても、ひとつの洞窟にあてはまっても、他の洞窟では全然違うということもあります。逆に数十キロ離れた洞窟壁画に似通った記号があるという地域ごとの法則が見られた例もありました。それは同じ民族か同じグループが描いたのではないかとという解釈が出来るわけです。そうしたアプローチを積み重ねていくことで、当時の人の心に迫れると思っています。

展示開催までの道のりと「学術協力」の仕事

— 今回の「ラスコー展」はどのように発案されて、どのようなステップで実現されたのでしょうか。

五十嵐 きっかけは2013年に届いた一通のメールです。シリアでネアンデルタール人の子供の骨

を発見された人類学者の赤澤威先生から「ラスコー展が世界を巡回するという記事を見たが日本には来る予定はないのだろうか?」といった内容のメールでした。そこで国立科学博物館の海部陽介さんにその旨をお伝えしたところ、海部さんがフランスのラスコー展の担当者と連絡を取り、さらに日本の新聞社とテレビ局をスポンサーに決めて、日本での開催が決まったのです。

海部さんは日本でのラスコー展の監修を務めておられ、リーダーとして開催をまとめられました。そして日本での開催がほぼ決まった時点で、私に「ラスコー洞窟から発掘された本物の旧石器時代の美術品を展示したいので協力してほしい」と依頼されました。

— 旧石器時代の美術品を展示するにあたり、具体的にどのような準備をされたのでしょうか。

五十嵐 昔の研究者仲間などをたどり、日本で展示をしたい旨を手紙に書いて送るという地道な作業です。幸い、ラスコーのコレクションは、私が留学した古人類学研究所がほぼ全部持っていました。

というのも、古人類学研究所の創設者であるアンリ・ブルイユという高名な先史学者が、ラスコー洞窟の発掘を指導した中心的な存在なのです。ここを含め東京での展示は3ヶ所から借りたのですが、私は主に古人類学

て、たまたま残っているものが洞窟の中にあったのだと思いました。ラスコー展の洞窟壁画を見ていただくと分かると思うのですが、ものすごく絵が上手なのです。いきなりあの絵が生まれたわけでは絶対にはないのです。それで「洞窟壁画が美術のはじまりではない」と思ったわけです。それならこの洞窟壁画って何?と次なる疑問が湧いてきて、その疑問に動物と一緒に描かれている「記号」からアプローチしようと考えたわけです。

— 「記号」の研究は、フランスに留学してから本格的に取り組まれたのでしょうか。

五十嵐 そうです。大阪大学の先輩にフランスの「古人類学研究所」の先生を紹介していただきロータリー財団から奨学金をいただき、留学しました。その時にフランス各地やスペインをはじめ洞窟壁画を色々見て、また文献も読みあさり、壁画の動物像と記号のパターンのようなものを見つけ出せないかと試行錯誤する日々となりました。

そうした中で「点状の記号は、動物像の体と重なる例が少ない。これに対して「V字形や矢印形の記号は、ほぼ動物像と重なったりつながっている箇所にはばかり見られる」など、少しずつ発見がありました。

また「記号は動物像の後でつけたされたもの」という先入観が

を覚え、何とも言えず魅力的な時を感じるのです。

— 他にもヨーロッパには洞窟壁画がたくさんあるのでしょうか。

五十嵐 ポルトガルからウラル山脈まで300以上の洞窟壁画が発見されていて、特に集中しているのがフランスとスペインです。ラスコー洞窟があるフランス・ドルドーニュ県のヴェゼール溪谷一帯は特に多く、その中でも25ヶ所の洞窟壁画遺跡が「ヴェゼール溪谷の先史的景観と装飾洞窟群」として世界遺産に登録されています。

現在フランスでは約25の洞窟壁画が一般公開されていますが、見たいと思っても公開されていないものもあります。その時は、各地方の考古局に手紙を出して見学許可を得なければなりません。それを経ていざ現地で見学が出来ると、何だか私一人だけが何万年も前の人と同じ壁の前に立ち、同じ絵を見ている、という特別な感情も覚えます。

「美術のはじまり」は何か

— 研究のきっかけでもあった「美術のはじまりは何か?」という答えは見えたのでしょうか。

五十嵐 実は洞窟壁画を見るようになると「これは美術のはじまりではない」と感じてきたのです。美術のはじまりはもっと昔にあっ

特別企画

太古の人類と触れあう
感覚が洞窟壁画の魅力

— 五十嵐先生は、なぜ洞窟壁画を研究しようと思われたのですか。幼い頃から興味があったのでしょうか。

五十嵐 小学生、中学生と野球やソフトボールをしていた野球少女でしたから、まったく興味がありませんでした。(笑)

— えっ、野球少女!? ちなみに「ジャンヌ」というお名前は?

五十嵐 日本人の両親がフランス好きだったこともあり、名前は「ジャンヌ」と。祖母は何のためらいもなく、フランスに居た父に代わって出生届けを出したそうです。(笑)私は4歳から18歳まで石川県金沢市で育ち、野球は子供の頃に打ち込んだ熱が大人になっても冷めず、留学していたフランスでも仲間を見つけては野球をしていました。



20年前にマンモスやウマの壁画で有名なマイエンヌ・シアンヌ洞窟にて調査を行った五十嵐先生(右)

特別企画

自らも心がける「知った
気にならない」大切さ

——五十嵐先生は自身の研究と並行して教壇にも立たれ、学生に教える立場でもありますね。洞窟壁画や、旧石器時代の美術を教えていくのに、心がけていることを教えてください。

五十嵐 洞窟壁画は世界中で研究されているものの、本当に未知の分野なのです。なので学生たちには、わずかな材料から「知った気にならないでほしい」と伝えています。というのは、洞窟壁画はその一部を切り取って、その人が組みやすいストーリーで語られている本や研究も多いのです。例えば、神経生理学という分野から語られたもので、トランス状態になった時に人を見るとされる幻覚—幾何学模様や半人半獣など—それが古代のシャーマンによって壁画に描かれたという論があります。しかしシャーマンって何？ということも明確ではありませんし、シャーマンを研究したもので



アクセサリを身につけた埋葬人骨(レプリカ)

はトランス状態になっていたのではなく、演じてただけだ、というものもあるのです。とかく非西洋的なものをシャーマンという言葉で括ってしまう傾向もあります。実は日本では、このように洞窟壁画がシャーマニズムの中で語られることが多く、翻訳された本もシャーマニズム論と結びつけたものが多いのです。ですがフランスやイギリスの洞窟壁画の研究家などは、それに異論を唱えています。そうした背景を知らないで、「洞窟壁画や洞窟壁画の記号=シャーマニズム」と知った気になることは非常に危険だということは意識してもらうようにしています。

——数万年前の未知の分野であるだけに、偏った短絡的な解釈も現れがちになるわけですね。

五十嵐 そうです。ラスコー展をご覧頂いて興味を持って頂くのは非常に嬉しいことですが、ラスコー洞窟のことがどの洞窟壁画にもあてはまることかという、それもまた全然違うわけです。ラスコー展を見て「洞窟壁画は当時の人



ラスコー洞窟の形状がよくわかる10分の1模型

の美術ギャラリーのようなもの」と感想を持った方もいましたが、それはラスコー洞窟のほんの一部だけを見てのことで、あらゆる洞窟壁画を見て回るとそう言い切ることは出来ません。本当にいろんな洞窟壁画の種類があって、なぜ?どうして?の連続です。ひとつの結論で尚早に結論づけたり、「知った気にならない」ということは、私が教える学生にとっても、私自身にとっても、非常に大切なことだと思います。そうしたことを心がけて、洞窟壁画や旧石器時代の美術のことをより深めていければと思っています。

「世界遺産 ラスコー展」は、東京・東北での開催は終了しましたが、7月から9月まで九州・福岡県太宰府市で開催。2万年前のクロマニヨン人が描いた洞窟壁画が精密に復元された太古の傑作が実物大でご覧頂けます。

特別展「世界遺産 ラスコー展」
2017年7月11日(火)~9月3日(日)
福岡・九州国立博物館
<https://lascaux-fukuoka.jp/>

特別企画

研究所とサン=ジェルマン=アン=レーの国立考古学博物館にコンタクトをとりました。考古学博物館は私が選ぶ立場になり、かなり悩んだ末に色々な動物がモチーフになったものを貸し出していただきました。

ですが東京での展示ではよいが、東北や九州に持っていくのは許可出来ないという物もあり、九州会場のために、テレビ局の文化事業部がボルドーのアキテーヌ博物館に貸し出しをお願いしました。

——貴重な資産なので、ずいぶん神経を使われたでしょうね。

五十嵐 すごく大変だったのが“ファシリティレポート”です。これは展示する博物館がいかに安全な状態かということを細かく記載する必要があります。警備の状態、監視員の人数、防犯システムの会社や形式、湿度や温度の管理など、実に細かい指定項目をフランス語で提出しました。これには本当に苦労しました。

——「学術協力」と言っても様々にご苦労があるわけですね。そのようなことを経ての日本での展示ですが、その展示方法にも頭を悩まされたのでしょうか。

五十嵐 「ラスコー展」は世界を巡回してきたのですが、日本の人がより楽しんで見られるようにデザイナーやスタッフと知恵を絞

り合い、アレンジや工夫をしました。例えばラスコー洞窟を再現した模型は、海外では骨組みが見えていましたが、日本ではより雰囲気のある形に仕上げる事が出来ました。

洞窟壁画の年代測定に
使われる科学的手法

——洞窟壁画がいつ描かれたのかという年代決定には、様々な科学機器も使われていると思うのですが、どのような手法が使われているのでしょうか。

五十嵐 1980年代以後、科学的手法での年代測定は盛んになりました。それまでは洞窟壁画の絵の様式や、壁画の周辺から発掘された顔料や石器を分析するなど間接的な年代決定法が主だったのです。

そこに壁画の彩色に使われた顔料を直接測定する方法が取り入れられるようになりました。以前は測定に必要な量を壁画から採取するとダメージが大きかったので、なかなか出来なかったのですが、加速器を用いることでわずか数mgのサンプルで、顔料に含まれている放射性炭素の年代が測定出来るようになりました。この測定法で調査したところ、従来考えられていた制作年代の見直しの議論も実際に起こっています。同じ時期の制作とされていた2つの洞窟壁画に使われていた顔料の年代が実は違う

時期と分かったのです。

——科学機器の進歩で、制作年代の見直しが起こったわけですね。

五十嵐 そうです。2000年代からは、放射性炭素測定法に加え、ウラン系列法と呼ばれる年代測定法も用いられています。壁画を覆う方解石の形成時に水の中に含まれていた放射性ウランと、形成時には含まれていなかった放射性トリウムが手がかりです。ウランが水溶性、トリウムが非水溶性である特性のもとに、両者の比率を計測して、方解石が形成された年代を測定することで、その下にある壁画の年代を推測するというものです。

しかしこの方法も、先ほど申し上げた放射性炭素年代測定法も万能ではないのです。ウラン・トリウム法で調査したインドネシアの洞窟で、新しい年代に形成されたはずの外側の方解石がうんと古い年代という計測結果になってしまったことがあります。それは方解石が外界と反応して変質していたために誤った計測結果が出たものでした。また放射性炭素を計測する場合も、試料が汚染されていたり、バクテリアなど微生物の炭素が混入することで不正確な計測結果が出てしまい、議論になったことがあります。こうした理化学的なアプローチはまだ日が浅いものなので、慎重にデータを取り扱う必要があるのです。